

主 題：不安の中に輝く確かな知恵③**聖書箇所：詩篇37篇21-29節****テーマ：心を騒がせるようなものが周りにあふれる中で、みことばの知恵に頼って生きていく**

今朝続けて見るのは詩篇37篇、特に21-29節にかけて学んでいきたいと思えます。でも、その前にこれまでに考えてきたことを今一度思い返してみてください。私たちは今、年老いた人物から与えられる実際的な知恵について時間をかけて学んでいます。晩年を迎えた著者ダビデは人生を振り返って、自分自身が学んできた大切な真理を、ここに助言として記してくれていたのです。そんな彼は、良い時も悪い時も、喜びの時も悲しみの時も、もちろん苦しみの時も、よくわかっていた人物でした。若い頃には、ただ理不尽に自分にねたみを抱いたサウル王にいのちを狙われ、次の日があるのかもわからないような絶望的な状況を数十年にも渡り味わうことがありました。友や部下の裏切りにあい孤独を覚えたり、大病を患って死の危機に瀕することもありました。また王様になっても罪を犯した結果、我が子を失ったり、家庭のうちに深刻な問題が生じて自分の息子アブシャロムにその身を追われることもありました。こんな状況の中で果たして自分はやっていけるのだろうか、今起きている問題にどのようにして向き合えばいいのか私にはわからない…とつぶやいて、恐れや不安に心が支配されてもおかしくないような状況を彼は何度も何度も経験したのです。しかし、そんな苦しみを通してダビデは主とともに歩み、人生において大切な知恵を学びました。理不尽さや不安定さ、ひどい悪がはびこる世にあって、どのようにして喜びや平安を見出しながら生きていけるのかを実際に彼は体験しました。だからこそ、そんな彼が、今も変わらず不安や恐れにあふれるこの世の中にあって私たちひとりひとりがどう歩いていくべきなのかを、知恵としてはっきりと教えてくれていたのです。そして、すでに私たちは彼の四つの知恵のうちの二つを学んできました。

○年老いた人物からの四つの知恵：**1. 主に信頼して忠実に歩むこと 1-11節**

一つ目にダビデが教えてくれていた知恵は、「主に信頼して忠実に歩むこと」でした。たとえどんな状況に置かれようとも、一瞬にして消えてしまうはかない価値のないものに心を奪われ、不安や失意に落ち入るのではなく、すべてを支配しておられる偉大な主に信頼して歩いていくことが大切なのだと伝えてくれていました。確かにあまりにも理不尽で納得できない、自分には理解できないような場面に置かれれば、腹を立てたり心を騒がせてしまうことは容易に起こるでしょう。しかしそんな時にこそ、忍耐を持ってみこころに従い、すべてをゆだねて主の前に正しいことを忠実にやっていくこと、それこそが何よりも必要なのだと、ダビデはまず一つ目の知恵として与えてくれていたのです。

2. 全体像を正しくとらえて歩むこと 12-20節

二つ目に教えてくれていた知恵は、「全体像を正しく捉えて歩む」ということでした。確かに今、私たちが周りを見渡してみれば、そこに悪がはびこっている様子を目の当たりにします。罪に汚れた世界にあって、悪者が正しい者を憎んで傷つけたり、悲しみや痛みをもたらす問題が存在していることは、だれの目にも明らかな事実です。聖書もそれを否定しているわけではありません。でも同時に、それらは全体像のうち的一部分でしかないということをダビデは教えていました。「もう少し視野を広げて見れば、天では、そのような悪者たちを笑っておられるすべてを支配しておられる主権者が居られるのだ。」と教えてくれていたのです。「確かに悪がはびこっている。でも彼らをさばくその日はもうすでに主が決めておられる。力ある、どんなときも変わらない主がもうすでにさばきの日を定めておられる。そしてその主は、私たちとともにいてくださるのだ。」と。だからこそ、私たちはこの主にあっ

て、恐れや不安を抱く必要はありません。必ず勝利される偉大な主にあつて、この主の主、王の王をいつも見上げて、この方のうちに満足を見出して日々歩いていくことが私たちにはできるのです。これが二つ目にダビデが教えてくれていた知恵でした。

では、今日はその続き三つ目の知恵を一緒に考えてみましょう。三つ目に関しては21-29節に見て取ることができます。復習も兼ねて1-29節までをお読みします。

詩篇37篇 ダビデによる

「:1 悪を行う者に対して腹を立てるな。不正を行う者に対してねたみを起こすな。:2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。:3 【主】に信頼して善を行え。地に住み、誠実を養え。:4 【主】をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。:5 あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。:7 【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行う者は断ち切られる。しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ざしりして彼に向かう。:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。:16 ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。:17 なぜなら、悪者の腕は折られるが、【主】は正しい者をささえられるからだ。:18 【主】は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。:19 彼らはわざわいのときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。:20 しかし悪者は滅びる。【主】の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。:21 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。:22 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。:23 人の歩みは【主】によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。:24 その人は倒れてもまさかさまに倒されはしない。【主】がその手をささえおられるからだ。:25 私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。:26 その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。:27 悪を離れて善を行い、いつまでも住みつくようにせよ。:28 まことに、【主】は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。:29 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。」

3. 主のあわれみを覚えてあわれみ深く歩むこと 21-29節

三つ目に教えられていた知恵は「主のあわれみを覚えてあわれみ深く歩むこと」です。人生を通して不安や恐れを覚えても仕方がないような状況を何度も通ってきたダビデは、「主に信頼して忠実に歩むこと」、「全体像を正しく捉えて歩むこと」の二つに加え「主のあわれみを覚えてあわれみ深く歩むこと」を続きに記してくれていました。21-22節はこのように始まっています。「:21 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。:22 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。」皆さんもすぐに気付かれたかと思いますが、ダビデはここでも、悪者と正しい者の歩みについて対比していました。これまでも何度も見てきているように、主に逆らって生きる悪者というのはいつの日か必ず断ち切られて、主に忠実に生きる正しい者はこの世だけではなくその後も主から祝福が与えられる、と約束されていました。主の前に悪を追い求める者にはそれにふさわしい報いがあるし、主の前に喜ばれることを追い求める者にはそれにふさわしい報いがそれぞれ与えられるというわけです。

ここで皆さんに特に注目して欲しいのは21節に記されていたことばです。ダビデは悪者と正しい者

の生き方の違いについてはっきりとこう述べていました。21節「悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。」普段あまり触れませんが、実を言うと、この箇所でも用いられている「返さない」、「情け深くて」、「人に施す」の三つの動詞には“分詞”というものが用いられています。言い換えると、これは、これらの行為というものが継続的、持続的に行われているものだということです。ヘブル語のことばで分詞で用いられた場合、主に継続的、持続的に行われているものを指しています。もう少し言い換えるならば、それらは彼らの生き方の特徴だ、ということです。つまり悪者は、いつも何かに不足しているので貪欲でだれかから何かを借りることはあっても自ら与えることはないのに対して、正しい者はどんなときも情け深くて自ら進んで与えようとする、ということです。それが正しい者の生き方の特徴なのだということです。この「正しい者」に関して26節でもダビデはこう述べていました。「その人はいつも情け深く人に貸す。」ここで使われている「情け深く」ということばと「人に貸す」ということば、この二つの動詞にも同じように分詞が用いられています。ということは、主を愛して生きている者たちというのは、いつも情け深く人に貸す、人にあわれみ深く人に与える者だということで、それがその人の特徴だということです。少し立ち止まって考えてみてください。「その人はいつも情け深く人に貸す。」とありました。この「いつも」とはどういう意味ですか？「いつも」というのは当然「いつも」ですね。一日中ということです。昼の間も夜の間も、ということです。どんなときも、ということです。貧しい時も富む時も変わりません。喜びにあふれる時もたとえ苦難にあふれる時も変わりません。正しい者はいつも情け深くて喜んで人に与える者、喜んで人を助ける者として歩もうとしているということです。与えられることよりも与えることを追い求めている、それが正しい者の生き方の特徴でした。

このことに関しては別の聖書箇所も教えてくれています。たとえば箴言21：25－26を見てみると、「：25 なまけ者の欲望はその身を殺す。その手が働くことを拒むからだ。：26 この者は一日中、自分の欲望に明け暮れている。しかし、正しい人は人に与えて惜しまない。」とまた同じ箴言22：9「善意の人は祝福を受ける。自分のパンを寄るべのない者に与えるから。」と。正しい者はいつも情け深いのです。与えられることよりも与えることを求めるのだと聞いて、自分自身の歩みを振り返ってみてどうでしょうか？果たして、私たちはどのような状況にあらうとも、あわれみ深い者として歩んでいるのでしょうか？たとえば、恐れや不安を覚えさせるような状況に置かれる場合、果たして私たちは変わらずに惜しみなく与える者として歩んでいるのでしょうか？それとも、困難にあるときは自分自身のことだけに心が奪われて、「与える」ということを忘れてしまっていないでしょうか？もっと言えば、そのような状況にある時は、与えることよりもだれかから与えられることが当然だと思って、自分が欲しているもの自分が望んでいるものを手にすることができなければ憤りを覚えたり、不平不満に満ちていたりはしないでしょうか？どうです？私たちはいつも与える者ですか？私たちのあわれみ深さというものは状況によって左右されるものではないでしょうか？

確かに、私たちは「いつも情け深く人に与える」ということにおいて、難しさや弱さを覚えることがあります。では、どうすればダビデがここで言っていたように、いつも変わらずにあわれみ深くいることができるのでしょうか？自分自身が豊かなときや問題を経験していない時だけではなくて、たとえ困難や苦しみを覚えるような時でさえ、寛大で絶えず与える者として歩むことができるのでしょうか？感謝なことにダビデはその助けを、続く23－29節の間で挙げてくれています。特に正しい者がいつもあわれみ深く歩むことのできる二つの理由をここに記してくれています。ではそれがどのようなものなのか、それぞれよく考えてみましょう。

●正しい者がいつもあわれみ深く歩める二つの理由：

1) どんなときもささえてくださる主のあわれみを知っているから 23－26節

まず一つ目の理由は、「どんなときもささえてくださる主のあわれみを知っているから」です。正しい者は、主があわれみ深くその歩みをささえ続けてくださるということを知っているからこそ、いつもあわれみ深く歩むことができるのです。このようにダビデは23節で「人の歩みは【主】によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。」とはっきりと言っていました。「人の歩みは…確かにされます」と。

ここで二つのことばに注目してみてください。最初に使われていたこの「人」ということばですが、実を言うと、ここには普段あまり使われないヘブル語の単語が用いられています。というのも旧約聖書の中で「人」ということばはたくさん出てきます。全部同じことばが使われているわけではなくていろんなことばがありますが、ほとんどの場合「人」ということばを表すときには、「イシュ」であったり「アダム」といったことばが用いられています。でもこの箇所ではダビデはあえて「ゲベール」という違うことばを用いていたのです。この「ゲベール」ということばには「力の強い人」とか「戦士」という意味が含まれています。このことば自体は、その人物が持っている力強さというものを強調することばだったのです。つまり、ここでダビデが「人の歩み」と口にした時に、彼は単なる普通の人のお話をしていたのではなくて、力の強い者を指して、たとえそんな力の強い人物の歩みでさえも確かにされる、とそう述べていたのです。また、もう一つ「確かにされる」ということばがありました。このことばにはもともと「堅く建てられる」とか「揺るがぬものとされる」という意味がありますが、ここで皆さんに覚えて欲しいのは、このことばには「定める」とか「成立させる」という意味があることです。つまり「人の歩み」というものは「成立させられる」のです。力強い者の歩みも「成立させられる」のです。では一体だれによってそれがなされるのでしょうか？今、私はあえて飛ばして読みましたが、23節には「人の歩みは【主】によって確かにされる。」と書いていました。ほかのだれでもない主が人の歩みというものを成立させられる、というのです。言い換えれば、人の歩みというものを堅く定めているのは、その人自身でも周りの者でもないということです。どれだけ人がいろいろな思いや願いを持って綿密に計画を立てていたとしても、結局のところすべてのことを実際に決定されるのは、主権者である神様でしかありませんでした。この観点に関して、別のみことばもはっきりと教えてくれています。たとえば、エレミヤもエレミヤ10：23でこう言っています。「【主】よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。」また箴言16：9では「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは【主】である。」またチャールズ・スポルジョンもこの23節についてこう述べています。「彼の人生の歩みはすべて、深い恵みによってあらかじめ定められたものです。すべてが慈愛のうちに定められ、堅く建てられ、保たれているのです。イタズラな運命や気まぐれな偶然に支配されているではありません。私たちの人生の一步一步が、神の定めの対象なのです。」と。皆さんこの箇所だけ見てもすごいことが記されていたと思いませんか？どんな人であろうとも、一見すればだれの力も助けも必要としないような力強い者の歩みであったとしても、そのすべてが神様の御手のうちにある、ということです。だれひとりとして例外はありません。弱い者であろうが強い者であろうが、貧しい者であろうが富む者であろうが、みな同じだということです。また何一つとして自分勝手に自分の思いのままにできるものもありません。私たちの日々の歩みにおける一つ一つの出来事は主権者である主によってすべてが成り立っているのです。

そして、そんな偉大な主は、みこころを追い求めて歩む正しい者たちのことを心に留めてくださるだけでなく、その道を喜んでくださるだけでなく、たとえ倒れてしまうようなことがあったとしても、あわれみによってささえてくださるというのです。そのことが24節にこう続いていました。「その人が倒れてもまさかさまに倒されはしない。【主】がその手をささえておられるからだ。」ときに、正しい者も信仰のゆえに悪者に憎まれ、傷つけられることがあるでしょう。自分の手には負えないような試練が降りかかってくることもあるでしょう。そのような大きな苦しみを味わえば、落ち込んで涙することも、

自分にはもうどうすることもできないと失意に飲み込まれてしまうこともあるかもしれません。でもそのような苦難に置かれることがあったとしても、すべてを支配しておられる主がいつも変わらずにささえてくださるというのです。「その人は倒れてもまさかさまに倒されはしない。【主】がその手をささえておられるからだ。」と。まるで、父親が自分の子どもにいつも目を配って、転んでもいつも手を掴んで起こしてくれるように、主はご自身の子たちの歩みを守ってくださって、たといつまづいたとしてもその手を離さないでささえてくださるというのです。だからこそ、正しい者がつまづくことはあっても完全に打ちのめされて起き上がれないなどということはない、というのです。これが聖書が教えてくれている神様の姿でした。

確かに、私たちの日々の歩みにあっては理解できないことが起こります。でも、神様は最初からすべてのことをご存じであって、もっと言えば、この方こそが、すべての道を思いのままに成り立たせ支配しておられるお方でした。確かに私たちの歩みにおいて、先が見えずに戸惑ってしまうこともあります。でも、この神様はどんなときも私たちの歩みに心を留めていてくださって、守ってくださるお方でした。確かに、私たちには歩みにおいて、苦しみを味わいつまづいて倒れてしまうこともあります。でもこの神様は、あわれみによって私たちをしっかりとささえて、必要な時に必要な助けを与えてくださるお方でした。このような神様が私たちとともにいてくださるのなら、それこそが私たちにとって最高の喜びではないでしょうか？私たちには到底、力や知恵などありません。おろかで弱い者です。でも、すべての主権者なるお方が、私たちをいつもささえてくださるというのです。

ダビデはこのあわれみ深い主のすばらしさを、長い人生を通して自分自身の体験として覚えていました。だからこそ、このように彼は続けて25節でもこう述べるのです。「私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。」これが、歳を重ねてダビデがたどり着いた結論でした。彼は自分の人生を振り返って考えた時に、主が正しい者のことをいつも守ってくださっている、だからこそその者たちが見捨てられることは決してない、とわかったのです。もちろんこれは主の前を正しく歩んでいる人たちが、困難や苦痛にあわないという話をしているのでも、貧しさや飢えに苦しまないという話をしているのでもありません。私たちがすでに見てきたように、ダビデはそのような現実があることも正しく認識していました。でも、たとえそのような困難な状況にあったとしても、あわれみ深い主はご自身に信頼して歩む者たちを変わずにささえてくださるお方だとわかったのです。誠実な主は決して正しい人を見捨てるのではなくて、良い時も悪い時もどんなときも離れずとともにいてくださるお方なのだ、と彼は自分自身の体験を通してもしりました。それが、彼が知った主のすばらしさだったのです。

そして皆さん、そのような主のすばらしさを知っている人物がとるにふさわしいふるまいとは何だと思えます？苦難の中に置かれていても、正しい者はいつも神様が守ってくださるのだと知っている人物にふさわしい応答とは何だと思えます？それこそが、あわれみ深い主に倣って自分自身もあわれみ深く情け深く人に与えることでした。26節を続けて見ていくと、「その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。」とはっきりと言われていましたが、正しい者というのは、ただ受け取るだけの者ではありませんでした。彼らは苦しみの中で自己中心的になって、自分がだれかから与えられることだけを求めるような、そんな貪欲な人物でもありませんでした。そうではなくて、むしろ、彼らはあまりにも自分たちに与えられているもののすばらしさを知っていたからこそ、置かれていた状況に左右されることなく喜んで惜しみなく与えようとする人物だったのです。言い換えると、あわれみ深い主のそのあわれみを知っているからこそ、そのあわれみを周りの者にも示そうとするのです。あわれみ深い主のあわれみを知っている者は、そのあわれみを周りの者にも示したい、とそう歩もうとするのです。そしてこれは私たち信仰者ひとりひとりにとって、あわれみ深く与える歩みを実践していく上で非常に大切なカギとなるものです。

この点に関してあのパウロも教えてくれていたのです。Ⅱコリント8：1-4に具体例として見て取ることができます。まずこのように記されていきました。「：1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思ひます。：2 苦しみゆえの激しい試練の中にあつても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となつたのです。：3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、：4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願つたのです。」少しだけ背景を言うと、1節に出てきた「マケドニアの諸教会」。マケドニアの諸教会の人たちというのは、飢饉などを経験してひどく困窮していたエルサレム教会に対して献金を送っていたのです。彼らは、ひどい苦しみを味わっている同じ主を愛する兄弟姉妹たちに対して献金を与えることで、心からの愛を示そうとしていました。ここで皆さんに注目してほしいのは、彼らがそれをどんな状況の中でしていたのかということです。もう一度2節を見ていただくとこう書いていました。「苦しみゆえの激しい試練の中にあつても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となつたのです。」と。マケドニアの諸教会は、激しい試練に苦しんでいる時、極度の貧しさを覚えている時、まさにだれがどう考えても困難だと言われるようなそんな状況に置かれているその時に惜しみなく与えようとしていたということです。考えてみてください。当然、彼らには余裕などありませんでした。彼らは物や富にあふれていて、これは余分だからあげようということではなかつたのです。彼らは自分たちの生活もままならないほど何も持っていませんでした。しかしそんな中でも、彼らは犠牲を払って、困っている人々の必要を満たそうとしたのです。また皆さん、もっと言えば、彼らは「それをしたい」とパウロに願っていました。「パウロさん、私たちにどうか献金をさせてください。」と熱心に願っていたのです。4節を見ても、「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願つたのです。」彼らはだれかから強制されて嫌々ながらそれを行っていたのではありません。彼らは自分の意志をもって喜んであわれみを示そうとしたのです。

では一体なぜ、彼らはそのような態度をとることができたのでしょうか？なぜ彼らは自分たちが激しい試練を味わっている時に、極度の貧しさを覚えている時に、自分たちのものが僅かしかない中であつて自ら進んでささげることができたのでしょうか？それは、彼らは自分たちにすでに与えられていた主の恵みのすばらしさを知っていたからでした。彼らは自分たちに与えられたイエス・キリストのすばらしさに比べれば、福音のすばらしさに比べれば、ほかのすべてのものは取るに足らないものであると考えていたのです。もし彼らが持ち物や富のうちに自分の満足を見出そうとしていたなら、それらを喜んで手放そうとはしなかつたでしょう。なぜなら、そうすることによって自分の満足がなくなるからです。また、そういった富や持ち物に自分の喜びを見出そうとしていたなら、自分の手からそれらが離れていくときに彼らの喜びも失われていったでしょう。でも、全くそうではなかつたのです。「苦しみゆえの激しい試練の中にあつても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となつたのです。」彼らは貧しさの中でも喜びに満ちあふれていました。そして喜びに満ちあふれ過ぎていたからこそ、自分のうちに押しとどめることができなかつた喜びがあふれ出して、人々に惜しみなく与えようとしていたのです。間違いなく彼らの喜びや満足というものは、置かれている状況のうちにも自分たちの持っている物にも根差してはいませんでした。彼らの喜びというのは、周りの状況などには決して左右されることのない、決して変わるることのない主イエス・キリストの恵みのうちに根付いていたのです。

パウロは同じ8：9でもこんなことばを残していました。「あなたがたは、（コリントの兄弟姉妹たちのことですが）私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」富んでいたキリストは貧しくなられました。この方は天で持つておられた神の御子としてのその

栄光を放棄して、人としての性質を持ってこの地上に来られ、ご自分を卑しくして実に十字架の死にまでも従われたのです。本来なら、私たちこそがその罪ゆえに神様の御怒りを受けてさばかれるべきだったにもかかわらず、主が自ら進んで身代わりとなってその御怒りを耐え忍んでくださり、ご自分のいのちをささげてくださいました。この方が大きな犠牲を払ってくださったからこそ、貧しくなってきたからこそ、この方を信じる私たちが義とされ、罪の赦しを与えられ、そして、この方によって私たちは富む者となったのです。しかも、このキリストの犠牲というのは、私たちがそれに価するような状態になったから、与えられたものではありません。この方は私たちがまだ神の敵として歩む罪人であった時に、愛のゆえに自ら進んでそのいのちをささげてくださったのです。神様が与えてくださったキリストの贈り物というのは、到底ことばに表すことのできないそんな絶大な恵みでした。

マケドニアの教会の人たちはそんな主の惜しむことのない犠牲的な恵みというものを味わっていたからこそ、彼らはそれを知っていたからこそ、彼らはそれを自分のものとしていたからこそ、惜しむことなく犠牲的に与えようとしていました。主の恵みが、価しない者に注がれたものであるとわかっていたからこそ、彼らも喜んで必要を覚えている者たちに与えようとしていたのです。そうだとするならば、私たち自身はどうでしょう？私たちが「この主の計り知れない恵みは自分にも与えられている」と口にするのであれば、果たして私たちはどのようにして人の必要を満たそうとし、どのようにして人にあわれみを示そうとし、どのようにして人に与えようとしているのでしょうか？主が自分にしてくださったように、惜しむことなく与えようとしているのでしょうか？それとも、だれかから言われたいとしない、周りの人がして仕方がないから自分もするというような、嫌々ながら強いられたものではないでしょうか？私たちの示すあわれみは、私のあわれみにあの人には価するから私はあわれみを示すが、あの方はあわれみに価しないので私はあの人には何もしない、というような相手からの見返りを求める条件付のものではないでしょうか？それとも、一切何も受けるに価しなかったこんな私たちひとりひとりに対して恵みを注いでくださったその主のように、自ら進んで与えようとする者でしょうか？ヨハネもはっきりとこのように述べていました。Ⅰヨハネ3：16－17に「16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」と。「キリストが私のためにご自分のいのちを捨ててくださった。それによって愛がわかった者は、そのような犠牲的なあわれみを受けたのなら、兄弟が困っていれば絶対にあわれみの心を閉ざそうとはしないででしょう。」と。私たちはあわれみ深く人に喜んで与えることができます。それは何も私たち自身のうちに力や知恵があるからではありません。まず、私たちにあわれみ深くことばで言い表すことのできない恵みを与えてくださった主がおられ、それを自分のものとしているからです。主権者であって、正しい者をいつもささえてくださるその主のあわれみ深さを知っているからこそ、自分のものとしているからこそ、私たちも周りの者にいつもそれと同じあわれみを示そうとするのです。いつもあわれみ深い主のあわれみを知っている者は、喜んで周りの者にもそのあわれみを示そうとするのです。それが正しい者がいつもあわれみ深く歩むことのできる一つの理由でした。主のあわれみを知っているから、だから同じようにあわれみを示そうとするわけです。

2) どんなときも離れることのない主の愛を知っているから 27－29節

そして、なぜ正しい者がいつもあわれみ深く歩めるのか、二つ目の理由は、「どんなときも離れることのない主の愛を知っているから」です。正しい者は、主の愛がいつまでも変わることがなく決して自分を見捨てることがないと知っているからこそ、いつもあわれみ深く歩めるのです。27節にまずこう書いていました。「悪を離れて善を行い、いつまでも住みつくようにせよ。」ダビデはここで、主に信頼して従っていく者たちが、悪を離れて善を行うこと、正しいことをいつまでも追い求めていくことをはっきりと訴えていました。ここで「悪を離れて」ということばが出てきていますが、この「離れて」という

ことばには、もともと「顔を背ける」とか「向きを変える」といった意味が含まれています。ですから、ダビデはここで「悪を離れて」と言った時に、悪をするのをやめればそれで終わり、という話をしていたわけではなくて、悪をするのをやめてそこで立ち止まるのではなくて、意志を持って立ち返って向きを変えて、逆に主の前に喜ばれる善を行っていきなさい、と教えていました。この箇所に関してスポルジョンもわかりやすくこんな説明を残してくれています。「罪とは休戦も交渉もしてはなりません。ためらうことなく罪から遠ざかり反対の方向に向かって実践的に働くようにしなければならないのです。善を行うことを怠るような者はすぐに悪に陥ってしまいます。」と。まさにその通りですね。私たちが「これぐらいなら大丈夫でしょう、今回は最後もう次はしません。」などと言って少しでも罪に妥協するのであれば、気付いたときには、容易により深刻な問題に発展していることがあるのです。だからこそ、私たちは罪を“よし”とするのではなくて、いつも注意してそこから遠ざかって、その反対に惜しみなく与えるということも含めて、主の前に喜ばれることを熱心に成していくことが大切でした。聖さを追い求めて生きる私たちの歩みにおいて、これはとても大切な欠かせない知恵だったのです。

でも皆さん、主に従う者たちが悪を離れ、善を行うということには、それ以上に重要な理由がありました。そのことについてダビデは残りの箇所でこう述べていました。「:28 まことに【主】は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。:29 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。」なぜ、悪を離れて正しいことを追い求めることが大切なのか？それは公義を愛されるその主が、同じように正しいことを行う者を愛されて、そしてその者たちを決して決して見捨てることがないからでした。公義を愛される主は、正しいことを行う者のことも愛してくださるのです。これまでも見てきたように、神様に逆らう悪者には、いつの日にか正しくさばかれて完全に断ち切られるその時がやって来ます。しかし主の前を忠実に歩む正しい者は、主がだれにも引き離すことのできない、変わらぬ愛で、いつも守ってくださるのです。その者は何があろうと主に見捨てられることはない、というわけです。変わらぬ愛、引き離すことのできない愛、パウロはそんな愛について特にローマ8：35－37でもこのように記していました。「:35 私たちを、キリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。:36 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。:37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」立ち止まって考えてみてください。私たちは、果たしてどんなときに主の愛を疑ってしまうことがあるでしょうか？自分の手に負えない大きな困難に直面する時でしょうか？先の見えない苦しみにあっていつまでも変わらないその状況を目の当たりにするような時でしょうか？いつ皆さんは神様に疑問を抱いたりすることがあるでしょうか？確かに患難や試練を味わう時に、こんな自分のことなんて神様も愛してくれていないのではないかと不安な思いを抱いてしまい、その思いが次第に心を支配していけば、戸惑って希望を失ってしまうかもしれません。でもそんな中であって、パウロははっきりと教えてくれていました。「患難であろうが、苦しみであろうが、迫害であろうが、飢えであろうが、裸であろうが、危険であろうが、剣であろうが、どんなものであろうとも私たちがキリストの愛から引き離すことができるものなど一つもない。たとえ苦しみの中に置かれることがあろうとも、どんな状況にあろうとも、むしろ私たちは、私たちを愛してくださった方によって圧倒的な勝利者となるのだ。」と。また続きの38節からこう書いていました。「:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。これが、パウロが抱いていた揺るがぬ確信でした。「キリストにある神様の愛から、私たちを引き離すことができるものなど何一つとして存在しない。たとえ困難な状

況であろうと、死であろうが、いのちであろうが、力ある者であろうが、そういったものが愛を妨げるようなことはできない。そういったことができるものは一つとして存在しない。」と。

考えてみてください。私たちは、かつて神様から遠く引き離された存在でした。生まれながらに創造主なる神様に逆らって、罪の中を歩んでいた私たちひとりひとりには、どうあがいたとしても、この聖く正しい神様と関係を持つことなど到底できなかつたのです。どれだけ私たちが力を持ってしようとも、どれだけ知恵を持ってしようとも、たとえどれだけ私たちが私たちの目に正しい良いと思われることを行っていたとしても、この方の完全な基準を満たすことなど不可能でした。だからこそ、自分の努力によって、罪によって壊れた関係を修復することなど絶対にできなかつたのです。私たちには希望なんてありませんでした。私たちはどうすることもできませんでした。でもそんなどうしようもない愚かな罪人であったときに、ほかのだれでもない主が私たちのことを愛してくださり、私たちのことを探し出してくださつたのです。別に、神様にとって私たちが必要だつたからではありません。ましてや、私たちがこれに価する価値のある存在だつたからそれをしてくださったわけでもありません。私たちのことをご自分の子どもにしようとあらかじめ決めておられたその神様の愛によって、神様ご自身が私たちと神様との壊れた関係を修復してくださつたのです。エペソ 1 : 4 - 5 に「:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあつて選び、御前で聖く、傷のない者にしようとなされました。:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしよう、愛をもってあらかじめ決めておられました。」と書かれています。「愛をもってあらかじめ決めておられました。」と。私たちではありません。神様がただ大きな愛によって神の御子を送ってください、そして、この方を信じるすべての者に永遠のいのちを与えると約束してくださつたのです。私たちは、このように決して変わることはない、決して離れることもない計り知れないほどの愛のうちに、今を生きていくことができるのです。

そうだとすれば、このような愛を与えられた者にふさわしい応答とは、一体何だと思えます？言うまでもありません。愛を受けた者は、愛を受けた者として、あわれみ深くその愛をほかの人々にも与えたいと願って歩む者になるのです。果たして今、私たちはこのキリストの愛を知っている者にふさわしい歩みをしているのでしょうか？私たちの周りの人たちは、私たちのうちにキリストの愛を見るでしょうか？私たちの周りの人たちは何を私たちのうちに見るのでしょうか？私たちが一体何に満足を見出していて、何に信頼を置いていて、何に喜びを見出して歩いていて、何に希望を見出して歩んでいるのか？もっと言えば、果たして私たちはどんな神様を人々に知ってほしいと、本当に思っているのでしょうか？世の光として地の塩として証人として生きる私たちは、まだ主を知らない人に一体どんな神様を知ってほしいと願っているのでしょうか？あわれみ深いお方でしょうか？それともそうではない、みことばが教えている姿とは全くかけ離れたお方ではないのでしょうか？

ダビデは、誠実な主は決して正しい人を見捨てることはなくて、良い時も悪い時もどんなときも離れずにとともにいてくださるということを、自分のこととして知っていました。長年のその人生を通して、主のあわれみを味わって、そのすばらしい主を知っていました。マケドニアの諸教会も、またパウロも、主イエス・キリストを通して現されたその神様の恵みの偉大さというものを、自分のこととして知っていました。あまりにもその恵みがすばらしいものであることを、自分のこととしてわかっていました。だからこそ、彼らはたとえ困難な状況に置かれていたとしても、貧困の状態にあつたとしても、どうにかしてでも犠牲を払って喜んで、自分自身を主と人とのためにささげて生きていこうとしていたのです。

では、私たちはどうでしょう？私たちが困難にあるとき、自分自身のことだけに心が奪われて、与えることを忘れていたりはしないでしょうか？与えることよりも、だれかから与えられることだけに思いがとらわれていないでしょうか？私たちのあわれみ深さとは、状況によって左右されてしまうものではないでしょうか？そのあわれみ深さは、何に基盤を置いているものでしょうか？確かに、私たちは惜しみ

なく与えるということにおいて難しさを覚えることがあります。だからもし、そのように難しさを覚えるのなら、いつも思い出すことです。私たちの主はあわれみ深いお方でした。みことばに描かれていたその主の姿を覚えることです。そして皆さん、何よりも、あのイエス・キリストの十字架に示された私たちに与えられたことばに表すことのできないほどの絶大な神様の恵みと愛というものを覚えることです。私たちはすでにそれを与えられました。与えられたのなら、私たちはどのようにしてそれを与えようとするかです。もしまだ、この中に主イエス・キリストを自分の主として、救い主として知らない方がおられるなら、この主のもとに来てください。主はご自分のもとに罪を、自分自身の歩みを悔い改めて間違っていたと認めて、この主を自分の救い主と信じて歩む者に救いを、罪の赦しを与えてくださる、とそう約束してくださっていました。ですから、この主をきょう知って帰ってください。

皆さん、私たちは大きなあわれみを受けました。だから私たちは大きなあわれみを示すことができます。私たちに知恵や力があるのではありません。私たちに大きなあわれみを示してくださったお方がおられるからこそ、私たちはそれを成していくことができます。だからこそ、主により頼んで私たち自身もあわれみ深く与える者としてますますともに成長していきましょう。